

## 1927年『日佛會館學報』における日本の教育情報

— エリー・オーブインの “Un Type de la Littérature  
Japonaise Contemporaine Le Gakusei” —

Information about Education in Japan  
In *Bulletin de la Maison Franco-Japonaise*, 1927  
— Elie Aubouin's “Un Type de la Littérature  
Japonaise Contemporaine Le Gakusei” —

飯 田 史 也

IIDA Fumiya  
学校教育講座

(2001年9月10日 受理)

はじめに

本稿は、平成11～13年度科学研究費基盤研究B「教育交渉史における日本教育観の形成と展開」の一環として考察するものである。

日本の教育情報については、日本開国期から太平洋戦争期にいたるまで、フランスにおいても多くの論述がなされた<sup>1)</sup>。本稿で取り上げるのは、1924年に設立された日仏会館の紀要『日佛會館學報』第I巻第2号、1927年(Bulletin de la Maison Franco-Japonaise, T. I, No. 2, 1927.)<sup>2)</sup>に掲載されたエリー・オーブイン(Elie Aubouin)の論考“Un Type de la Littérature Japonaise Contemporaine Le Gakusei”(和名「日本現代小説學生氣質」)である。『日佛會館學報』は、1927年の第I巻から1947年の第XV巻までの計42号に、31の論文が掲載されている。うち第I巻第2号には、おなじオーブインによる、「日本高等教育制度」(L'enseignement supérieur au Japon Règlements et programmes)という論文も載せられているが、日本の教育に関する論文は、31論文中、オーブインの著したこの2編だけである。なおオーブインは、小説の引用をすべてフランス語翻訳でおこなっている。本稿では、オーブインが各小説のどの部分に注目して考察を行っているかを検証したいので、重要と思われるものについては、オーブイン引用該当部分を、各小説の日本語原著から引用する。

### I オーブインの見た日本の小説における「GAKUSEI」の姿

オーブインはまず、明治～大正期の代表的な作家の小説のうち、([GAKUSEI] 學生)の、生活を取り上げたものとして、

坪内逍遙 『書生氣質』(Caractère des étudiants) 1885

久米正雄 『学生時代』(Le temps d'école) 1918

夏目漱石 『坊ちゃん』(Gamin) 1906

中村星湖 『少年行』(Jeunesse) 1908

を例示する。なお( )内は、題名の仏訳である。続けてオーブインは、学校生活そのものの思い出について述べたものの例として、

二葉亭四迷 『平凡』(Médiocrité) 1907

正宗白鳥 『何処へ』(Où?) 1908

國木田独歩 『運命論者』(Le Fataliste) 1906

徳富蘆花 『思出の記』(Souvenirs) 1901

をあげる。さらに、実際に学生・生徒として生活を送る主人公を描いたものとして、

島崎藤村 『貧しい理学士』(Le pauvre Licencié ès-sciences) 1926

尾崎紅葉 『金色夜叉』(Le Démon de l'or) 1897

夏目漱石 『こゝろ』(Le Cœur) 1915

有島武郎 『宣言』(Profession de Foi) 1915

および、具体的な題名は提示されないが、菊池寛の多くの小説と戯曲が紹介される。

ぎやくに、教師を描いた著名な小説として、  
 田山花袋『蒲団』(Le Coussin) 1907  
 島崎藤村『三人』(Elles étaient trois)  
 1905  
 の2作品が、さらに子どもに心を配る父親を描いたものとして、  
 島崎藤村『嵐』(La Tempête) 1920  
 が紹介される。

オープンインはさらに、その他の小説の中においても、  
 たとえそれがどのようなテーマや主人公を描いたものであっても、各ページにSENSEI先生(Professeur), GAKKO学校(Ecole), BENKYO勉強(Etude), SOTUGYO卒業(Examen ou Diplôme de sortie), SHIKEN試験(Examen)などのことば、あるいはその派生語や合成語を見つけることができる。(p.15, 以下、オープンインからの引用については、( )内にそのページを記す。また引用中の( )はすべて引用者による。)とする。

オープンインは、まず島崎藤村の『春』を紹介する。オープンインは、そのあらすじを簡潔に説明しつつ、『春』の登場人物の一人が、女学校の教師であったために、読者が日本の女学校の生徒達について、あるいは女学校の卒業式の様子などについて知ることができることに注目している。『春』には、登場人物の一人の「岸本捨吉」が、勤めていた女学校の卒業式に参列する場面がある。小説中にはその卒業式のプログラムが掲載されており、架空のものではあるが、読者は「歓迎の歌」「勅語奉読」「卒業式の歌」から「答辞告别」「琴合奏」にいたる、女学校の卒業式の式次を知ることができる<sup>3)</sup>。オープンインは、別の登場人物「青木俊一」が遺した手記の中にも、学校時代の記憶(souvenirs d'école)が綴られていることに触れる。

つづいてオープンインは、作者と読者とがともに学生生活の不安を共有するもっとも特徴的な小説として、夏目漱石の『こゝろ』を提示する。オープンインによれば、読者は、主人公の「私」から学業、試験、希望、学生としての喜び、失意について知ることになる。そして読者は、主人公とともに故郷に帰省し、同じ試験を受け、修了者への訓示を聞くのである。オープンインはここで、「主人公は、毎学期終了後の休業期間中、我々(読者)を彼の故郷へ連れてゆく(Il nous emmène en vacances dans son pays natal, à la fin de chaque trimestre)」(p.16)としているが、実

際には『こゝろ』において、主人公の「私」が帰省するのは、父の病気によるものであり、またその帰省も必ずしも休業期間中のものではない<sup>4)</sup>。

オープンインは、1922~23年の、10,984,468人というデータを示し(p.16)、日本社会における学生の比率はかなり大きいものであると指摘する。これら学生たちについてオープンインが注目するのは、そのいでたちである。

日本の学生たちは金ボタンのついた上着と、丸い、あるいは方形のひさし帽(veste à boutons d'or, casquette ronde ou carrée)を身につけている。そして、少なくともその学生たちの考えにおいては、それらの制服は大きな威光をもつ。そして、日本の街のあちこちを歩き回る学生たちの姿は、馴染み深いものである。(p.16)

そうした学生・生徒達の姿を描いたものとして、オープンインが引用するのは、谷崎潤一郎の『The Affair of Two Watches』、および中村星湖の『少年行』である。オープンイン引用部分では、『The Affair of Two Watches』では、大学生特有のしぐさやいでたちを、また『少年行』では、中学生の制服の姿を知ることができる。

正門と赤門と二つの口から大学生がぼろぼろ出て来て其の中へ交った。其れも小学校や中学校の生徒のやうに多勢景気よく練って来るのではない。大概は一人づつ、稀には二三人組み合せて、洋服の者は外套の隠囊に両手を突っ込み、襟に顔を埋めてすたすた行く。和服の者は懐ろへ筆記帳を四五冊無理やりに拵ぢ込み、右の手の人差指一本だけ袖口からちよいと出して、それへインキ壺を引っ懸けて行く。どれも、これも、暗い顔をして俯向いて歩く所は一角の哲学者めいて居るが、何も文科の生徒ばかりではない。かふ云う天氣に黄昏の街を歩くと、大概な人の顔は哲学者面になって居る。その哲学者面を砂塵がさあっと吹きつけて通った後では、確かに二三人は消えて失って居るだらう。<sup>5)</sup>

黒の制服に脚絆を着けた一行は、既に宿屋の前に並んで居た。

物見高い女子供は真黒に出て見て居る。

皆一様に海軍帽、巻いて肩にした外套の緋羅紗や黒縹子の裏を見せ、金ボタンを光らせて整然と列を作った凜々しい扮装を、遙かに見かけた時(後略)<sup>6)</sup>

オープンインは、小説の作者達の多くが、学校教師であったことに注目する。早稲田大学の坪内道

遙、松山中学校、第五高等学校、東京帝国大学に勤務した夏目漱石、札幌農学校に勤務した有島武郎、明治女学校の島崎藤村、東京外国語学校の二葉亭四迷のほか、さらにそれぞれ東京帝国大学と早稲田大学で英文学の学位をとった久米正雄と中村星湖が例示される。なお他の作家達については、その勤務した校名が具体的に記されているのに対し、国木田独歩については、独歩の名前だけが掲示されるにとどまっている。オーブインは、たとえば夏目漱石の教師としての経験が、『坊ちゃん』に反映していること、オーブインに例示された作家達の中で唯一女学校の教師であった島崎藤村が、女学校の様子を描いた『三人』や『春』を著していることを述べる。オーブインは、このように学校教師が小説を著したことについて、

教師達の小説文学への参入は、驚くことではない。現代の小説を創ったのは彼等なのだ。(p.18)  
フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語の教師達は、私が挙げた作家達のほとんどがそのようなのであるが、海外の思想を取り入れるための、当然の翻訳者 (truchements naturels) なのである。(p.19)

さらに、

海外の作家を翻訳することで、十分な収入を得る事ができるのは、たいへん恵まれた事なのだ (p.19)

と述べる。

II オーブインの見た、日本の学生の労苦と苦悩  
オーブインは、日本の学生のおもな特徴が、その熱心な学習意欲であるとし、

学業が唯一の活動である学生や生徒も、勘定台や事務所での仕事のあと夜学で学業を続ける商人や公務員も、非常に熱心に学んでいる。(p.19)と述べる。しかし、日本の学生には様々な労苦や苦悩を抱えている。オーブインが最初に注目するのは、学校における定期考査についてである。オーブインはまず、二葉亭四迷の『平凡』の一部を引用し、いわゆる「一夜潰け」似ついでの記述を示す。

狼狽て、片端から及第のお呪ひの御符の積で鵜呑にして、而して試験が済むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了ふ。

今になって考へて見ると、無意味だった。何の為に学校へ通ったのかと聞かれれば、試験の為にといふより外はない。全く其頃の私の眼中には試験の外に何物も無った。試験の為に勉強し、試験の成績に一喜一憂し、如何な事でも試

験に関係の無い事なら、如何となれと余処に見て、生命の殆ど全部を挙げて試験の上に繋げてみたから、若し其頃の私の生涯から試験といふものを取去ったら、跡は他愛のない烟のやうな物になって了ふ。

これは、しかし、私ばかりというではなかった。級友といふ級友が皆然うで、平生の勉強家は勿論、金箔附の不勉強家も、試験の時だけは、言合せたやうに、一色に血眼になって……鵜の真似をやる、丸呑に呑込めるだけ無闇に呑込む。<sup>7)</sup>

さらにオーブインが注目する学生の労苦は、入学試験についてである。

すべての生徒達は、大学に進学して学業を続けたいと願っているが、それは容易なことではない。入学試験を経なければ帝国大学には入れず、だいたい志願者の2/5は、不合格となる。(p.20)

入学試験をめぐってオーブインが紹介するのは、久米正雄の『受験生の手記』に描かれた、入学試験場の様子である。

その内に音頭取りの下岡が時計を見て、「おい、もうあと十五分の寿命だぜ。そろそろ教室へ入らうか。」と云った。

「それぢゃ屠所に曳かれて行くかな。まさに断頭台へ上る思ひだね。」佐々木は自棄の快活さで応じた。

私も便所へ行って、それから指定の教室へ入った。例に依って分館の教室は暗く汚かった。去年で馴れてゐるので、出入にはさう慌てなかった。ふと私は弟はどうしてるだらうと思った。

机に坐ってそはだつ心を鎮めてゐると鐘が鳴り響いた。私の心臓は再びどきどき打ち始めた。

試験官が入って来た。去年も見覚えのある頭の禿げて眼の大きい、人の好さうな老教師だったが、それでも何となく怖かった。何でも体操の教官らしく、吃驚する位の大声を出した。去年はそれにひどく脅かされたものだ。

試験官は例によって、先づ受験写真と実物とを見比べた。受験生は見られる時に、誰も妙に緊張した顔を作った。試験官は薄笑を浮べ乍ら、さっさとそれを見て通った。何だか人を見るよりも、物を見ると云った様子が、私には可笑しく感ぜられた。<sup>8)</sup>

『受験生の手記』は悲劇性の高い物語であるが、この部分には当時の入学試験の様子や、緊張する受験生達の心理が比較的客観的に述べられている。つづけてオーブインは、

たとえ、受験生が入学の容易な私立の大学へとその入学レベルを下げたとしても、そこには大きな障害が待ち構えている。(p.21)

と、日本の学生の経済的労苦について述べる。オーブインは、『平凡』の以下の部分を引用する。

さて困った事には、珍らしくもない話だけれど、金の出処がない。

父は其頃県庁の小吏であった。薄給でかつがっ一家を支へてゐたので、月給だけでは私を中学へ入れる事すら覚束なかったのだが、幸ひ親譲りの地所が少々と小さな貸家が二軒あったので、其上りで如何にか斯うにか糊塗なつてゐたのだ。だから到底も私を東京へ遣れないといふ父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張東京へ出たい。<sup>9)</sup>

さらにオーブインは、同様に進学の夢と家庭の経済的な状況との間で苦悩する、『少年行』の主人公の様子を引用する。オーブインが引用するのは、

自分も来年は中学へ入って見たいと父へ相談を掛けたが、父は、新しく谷村へ立った染織学校へ入れる積りであったらしい事を云ふ、母にはがながんわなられるだけに我儘も云ふが、父に対しては気の毒で強ひては云へぬ。<sup>10)</sup>

という、主人公の家庭の経済的状況が述べられている部分、また中学校への進学が困難であるという主人公の相談を受けた「池辺先生」が、

「そりゃ不可、亜米利加と日本とは全然風気が違ふからな。彼国は学生の自活しても通れるやうに都合よく出来てるんだ。日本でも東京あたりぢゃ、苦学生なんちって新聞売や牛乳配達をする者もあるが、そりゃ勉強の時間なんぞはありゃせん。偶に成功する者があつても大抵は誰かの補助があるからだよ(後略)」<sup>11)</sup>

と述べて、主人公へ師範学校への進学を勧める場面、さらに中学校進学への夢止みがたく、結局、伯父の住む東京への家出を企て、

残りの十五六円、汽車賃を引いて一月位は宿にも居られるだらう、其内には何か稼ぐ口が見附かるだらう、牛乳配達でも何でもよい<sup>12)</sup>

と、東京での生活を考える場面である。オーブイン引用部分には、経済的に苦しい場合に、師範学校や職業学校が代替の進学先になりうること、アメリカのように奨学金制度が整備されていない当時の日本社会の様子、さらには東京に暮らす「苦学生」の生活スタイルが示されている。これらを踏まえて、オーブインが言及するのは、『少年行』の「池辺先生」も口にした「苦学生」と、

「書生」というふたつのことばである。

書生ということばは、明治初期には学生一般をさしたが、現在では、生活と保護との保証を得るために裕福な家の雑務に携わる者をさす。富豪や篤志家は、往々にして2人ないし3人の書生を持つことがある。そして日本の上流階級の家を訪れた場合、大学の制服を着た書生の受付に出迎えられるのは珍しいことではない。書生の任務の煩雑さは、しばしばその学業の方針を変えるし、学生であるよりも、召し使いであると言わなければならない。(p.24)

具体的な書生の姿を示すために、オーブインはまず、二葉亭四迷の『平凡』の主人公について解説する。それはこの主人公が、法律を学ぶために上京して伯父の家で世話になるが、伯父から書生として扱われ、様々な雑務を言い付けられる部分である。さらにオーブインは、夏目漱石の『それから』における主人公「代助」と、その書生「門野」との会話部分を引用する。

つづけてオーブインは、坪内逍遙の『書生気質』の第十二回「学校から追出される。親父の資送は絶える。どこで断つ岡町に懶惰生の翻訳三昧」から、「ナニサ、汗牛堂の翻訳がネ、一葉十行二十字で以て、二十五銭といふ約束さ。(中略)是も勢のしからしむる所、財政危急の今日に在っては、是非に及ばぬといふ次第さ。」<sup>13)</sup>

という部分を引用し、生活の糧を得るために翻訳を行う学生の姿に注目する。

つぎにオーブインは、卒業した学生の就職についての問題を論ずる。

残念なことに、学業を認める卒業証書や学位も、その所有者の生計を保証するものではない。新聞は、大学や各種の専門学校卒業者の不満の声を継続的に取り上げる。1ヶ月25～30円の給料で、新聞記者や雑誌社の社員の口を見つけた者も、特段哀れむには値しない。毎月数千人もが職業紹介所を訪れ、そこには次のような手記が残されている。

《私は、教育を受けるため東京へ出て、大学を修了し、学位を取った。少年期の夢を実現するため、仕事を探したが、見つける事はできなかった。両親は、私からの生活費をあてにしている。どうしたらよいのだろうか。》(p.28)

オーブインは、これら学生の就職の問題が、文学にはさして影響を与えていない事に注目する。これら問題は、とくに大戦後に起こってきたが、なお文学的な影響を持っていない。生活苦にある者は、米のために苦闘しており、心理学的な

分析を行う時間を持っていないのだ。(p.29)

つづけて、オーブインは国木田独歩の『運命論者』の一節を引用し、就職ということについては、しかしいかなる気掛かりな徴候もそこに現れていないことに注目する。オーブインが引用しているのは、自身の身上を告白する登場人物が、東京の養父から自身の就職について話があると呼び出される部分である。

「実は手紙で詳しく言ってやろうかとも思ったが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思ったらうし、又大学までとも志して居たらうけれど、人は一日も早く独立の生活を営む方が可えことはお前も知って居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律学校に入るのぢゃ。三年で卒業する。弁護士の試験を受ける。そして暁は私と懇意な弁護士の事務所に世話してやるから、其処で四五年も実地の勉強をするのぢゃ。其内に独立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となることが出来る。如何ぢゃな、其方が近道ぢゃぞ」<sup>14)</sup>

オーブインは引用していないが、この後、「其処で僕は最早進んで僕の希望を述どころではありません、たゞこれ命これ従ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。」<sup>15)</sup>という部分が続く。ここに描かれている青年の弱さは、養父に反抗できないその立場だけであり、オーブインの言うように、そこには就職難に苦悩する姿はない。

オーブインはつづけて、島崎藤村の『嵐』における父親像から、日本の若者の就職について考察する。

妻に先立たれ、家族を養っている父親は、子ども達の生活と将来を心配している。父親は長男についての懸案を、非常にヨーロッパ的なやり方で解決する。父は、美術学校の生徒の息子を、田舎での農作業へと送り出すのだ。フランス人の父親でも、そこまではやらないだらう。(p.30)

### Ⅲ オーブインの見た日本の伝統的教育と西洋の教育

オーブインは、日本の伝統的な教育の有り様について考察を続ける。オーブインが考察するのは「西洋の大学制度が導入されて以来、日本の若い学生に広まったある種の道徳的混乱 (un certain désarroi moral) の時期」(p.30) についてである。

すべての理論的実践的優位を秘伝の知識に付与するのは、日本人の精神の基本的な傾向のひとつ

である。昔の日本における教育は、いわば最も優れた後継者に対する、秘伝伝達のしきたりである。弟子はイニシエーションの長い試練に耐える。師の口から貴重な奥義を伝授されたいという思いは、注意力と素直さをもたらす。(中略) それらの修行は、一般に難解で、不注意な耳をあざむくような、謎と比喩の一種である。(p.30-1)

そして、弟子は師に対して「絶対的な敬意 (déférence la plus absolue)」(p.31) を示すことが求められる。オーブインは、このように伝統的な日本の師弟関係を混乱させたのが、西洋の教育システムであると述べる。

海外の書物による教育は、学生と教師との関係を混乱させた。学生はまだ、教育は参考資料ではなく規律なのだということを理解しておらず、また、自身の権威を保つために、知識の出所を隠さなければならない教師の言葉よりも、読書の方に多くの信頼を置いている。学生達はしょっちゅう欠くべからざる精神的指導を断って、奇妙な、理屈にあわない、新しい方法を探すのに躍起になっている。(p.31-2)

オーブインは、久米正雄の『嫌疑』、夏目漱石の『こゝろ』、徳富蘆花の『思出の記』から教師に関する記述の部分を引用する。うち『思出の記』の引用部分は、以下のところである。

今から思ふと教員先生 (実に好人物で、近眼で、煙草好きで、僕を非常に可愛がって、而して誤謬ばかり教へる先生だった。其金科玉条は寛の一字で、名は増見先生と云ったやうだ) 少し手加減をしたかも知れぬ、尤も少しは出来たかも知れぬ。東京から全国巡回して来た今の視学官昔は何と云ったか其先生 (僕等が如何様にエライ人と思ったらう! 増見先生如何様に震へたらう!) から誉められたことも覚えて居る。<sup>16)</sup>

ここには、子ども達に「誤謬」を教えてしまったり、視学官の来校対応に汲々とする担任教師の姿を、客観的に見つめる子どもの視点が示されている。オーブインにとっては、子ども達のこのような視点は、日本の伝統的な師弟関係には馴染まないものなのである。

オーブインは、ここまで「児童 (écolier)」と、「生徒 (collégien)」と、「学生 (étudiant)」とを区別してこなかったとし、日本の青少年が二つの特性をもっていると結論づける。それは、「子ども期の過度の重々しさ (l'excès de gravité du gamin)」(p.36) と「青年期の現実感覚の欠如 (le manque du sens des réalités de l'adolescent)」(p.36) である。オーブインは、そうし

た特性は日本の英語教育に起因すると考える。

英語教育が、若者が《conscious》になることを妨げている。子どもだけでなく青年が年令以上の重々しさを示し、自身の行動や考えを大袈裟に捉えているのを見るのはつらい。フランス語の教育は、重視されていない。その大きな理由は、おそらく我々の民族の快活さや無頓着さによるところが大きいのだろう。(p.36)

オーブインは、こうした欠点が、日本の児童に顕著であるとして、オーブインは、夏目漱石の『坊ちゃん』の冒頭部分、正宗白鳥の『何処へ』、中村星湖の『少年行』から、そのような子どもの姿を浮き彫りにしようとする。

小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさって帰って来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。

親類のものから西洋製のナイフを貰って綺麗な刃を日に磨いて、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れさうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切って見せると受け合った。そんなら君の指を切って見ると注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはずに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったんで、今だに親指は手に付いて居る。<sup>17)</sup>

彼れの生地たる丸亀の尋常小学校に学んだ頃も、試験の成績が他に劣ると口惜しくて夜も眠れぬといふ程であったが、東京の学校へ通ふこととなつては、殊にこの考へがひどい。その為に学課の復習を励むのみならず、身体の訓練をもつとめた。瘦っぽちと嘲られるのも無念である、年嵩の学生に腕づくで意地められるのもつらいし、腕力を養ひ筋肉も発達させねばならぬと、寒中シャツ一枚で木刀を揮ったこともある。力試しだといって二人の妹を箆に入れて担ひ、引くりかへって傷をつけたこともある、母からは悪戯が過ぎると叱られたが、彼れには悪戯でも慰みでもないのだ。幼い心にも自分の脆弱な体質が情なく、行く先々が案じられてゐたので、外目には滑稽とも見える体格修養も、自分には

最も真面目な行為であったのだ。しかし生来の体質は変りやうがない。それで度々母に向つて、「何故僕をこんな小ばげな身体に生みつけたんです」

と詰り、涙をこぼしたことさへあった。その癖友達の間へ出ると、「痩せててもおれは強いぞ」と力んで、喧嘩をしかけられて逃げることはない。或日も餓鬼大将に鬪られた時、ナイフで切りつけて、相手を驚かしたこともある。<sup>18)</sup>

然うだ、家出するより外はあるまい……五歳や六歳で死ぬ子もある、今生きたが儲物だとして、死ぬ積りで行ったって……然うだ、死んだって別に損はない訳だ、斯様な田舎でぐづぐづ一生を送るよりや、早く死んだ方がえゝかも知れぬ、そして其内にやお父つあん都合も宜くなるラ……が今の所ぢゃ仮令十分でなくても、学資と名の附く物を出して貰ふ事は無論出来まい、と云つて此決心を打開けて、石嚙り附いても独力で行つて試ようと云つた所で、親の身としては許して呉れやうもない。<sup>19)</sup>

これら3作品の主人公達の行動が、オーブインの眼には「過度の深刻さ」と映つたのである。

オーブインがつぎに注目するのは、もう少し上の世代における「鉄拳制裁」(La Justice du Poing de Fer) についてである。オーブインは久米正雄の『鉄拳制裁』などを援用しつつ、かなりの行数を裂いて「鉄拳制裁」の具体的な方法や、その理念について解説する。そして「鉄拳制裁」が、「高次の道徳の名のもとで行われ、いかなる報復もない」(p.39) ことにふれつつも、

子ども達の遊んだり有り余る活力で活き活きとする姿ではなく、先輩達の言動を信じ、それを真似ているのを見るのは忍びない。(p.39)

と述べる。

オーブインは、神経衰弱にまでいたる生活の辛さについて、夏目漱石の見解に注目する。オーブインの注目する学生達の顔には、強い悲しみの表情が現れ、ほとんどの場合、彼らは終わりのない物質的困難にもがいている。学生達は、下宿屋(Geshikuya)で気分れにイマジネーションに身を任せ、将来の漠然とした希望に向けて、なんであれとにかく勉強している。(p.41) さらにオーブインは『こゝろ』における「K」に注目する。「K」は養家から離縁されてしまっており、また友人からの思いやり以外、なんらの援助を受けることが出来ない。「K」は、聖書やコーランを読んでいるのだが、それは「Kはたゞ学問が自分の

目的ではないと主張するのです。意志の力を養って強い人になるのが自分の考だと云ふのです。それには成るべく窮屈な境遇にゐなくてはならないと結論する」<sup>20)</sup> ためのものである。他方でオープンインは、将来の進路を明確に決定していない主人公の事例として、正宗白鳥の『何処へ』における「健次」を示す。

大学三年の生活、健次の頭脳は非常の変化を来した。元法科へ入りたい気もあったのを、桂田との関係から文科と定ったので、入学後も心は迷ふ。自分の素質から云っても学者で安んじてゐられさうぢゃない。多量の書物を読んで一生を終る。下らないぢゃないか、それよりも政治家にでも実業家にでもなって、自分の考へが具体的に目の前に現はれるを見、生きた人間生きた事件の動揺起伏に接する方が面白くはないかと思ふこともあったが、さりとて断じて一を去って他に就く気にもなれぬ。それに課業として学ぶ哲学の問題、外国の詩歌小説、新刊の雑誌雑著、皆過敏な神経を刺激して、妄想は留め度がない。<sup>21)</sup>

オープンインは、これまで見てきた小説を、つぎのように集約する。

もし、学術書として書かれた、あるいはこれまで分析してきたような文学に分類されない、道徳書や啓蒙書を除けば、同じような印象を持つ書物はフランスにはほとんどなく、登場人物達が年令以上の不安感や熱意の中に生きるジュール・バレス (Jules Vallès) の『バシェリエ』(Bachelier) がそれにあたるだろう。

これらのすべては、学校の思い出であり我々にとっては幼年期の思い出である。それは、作家の幼年期の幻想と希望への感動的な一瞥であり、彼らの faïcheur (sic) と幼年期の無邪気な活気の再発見への努力であり、時間の流れを逆転させる。(p.41-2)

ここまで私が検討してきた小説において、感傷主義 (sentimentalisme) は、意志 (volonté) (の表現) よりずっと少ない。無分別に過った方向へと導かれる意志の大きな広がりには、つねに御し難い。(p.43)

オープンインは、最後に、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) がチェンバレン (Chamberlain) に宛てた手紙を引用する。

《スペンサー (Spencer) 以降、成功の秘けつは、よき動物になることである。日本の学生は、充分な強い意志を持つことへの執着を持っている。単純な人間味 (humanité) でもって、そ

れを是正してやらなければならない。》(p.43)

## 結語

先述のように、オープンインは「日本高等教育制度」(L'enseignement supérieur au Japon Règlements et programmes) という論文を、同じ『日佛會館學報』、第1巻第2号に掲載している。それが教育法規の紹介や各種の教育統計を紹介したものであるのに比べると、今回考察した“Un Type de la Littérature Japonaise Contemporaine Le Gakusei”は、性格のかなり異なるものである。オープンイン自身は、その研究の手法について何も述べてはいないが、たしかに小説の登場人物の言動を検証・分析すれば、たとえフィクションの存在であるとはいえ、日本の教育制度や教育文化の中に生きる学生や生徒達の生活の実体やその思いを、ありありと考察することができる。それは教育統計のデータからだけでは見えてきにくいものである。

しかし、オープンインの考察には、日本人にとって首肯しがたい部分もある。たとえばオープンインは、徳富蘆花の『思出の記』における「増見先生」についての記述に、日本の伝統的で親密な師弟関係の欠如を見ている。しかし「近眼で、煙草好きで、僕を非常に可愛がって、而して誤謬ばかり教へ(中略)」<sup>22)</sup> 視学官の来校に「震へ」<sup>23)</sup> といった表現の裏に示されている、「増見先生」の人間らしさや、主人公の「先生」への愛着を、ここから読み取れていないように思われる。また、「子ども期の過度の重々しさ (l'excès de gravité du gamin)」(p.36) が示されている例として、オープンインは『少年行』の主人公が、中学校進学を目指して家出する場面を引用している。中学校進学へのやむにやまれぬ思いから家出をし、それが失敗して素直に連れ戻される主人公の行動は、この小説の文脈ではむしろ、一途で純朴な子どもらしいものとして描かれている。二葉亭四迷は『少年行』についての書評の中で、その主人公(甲)と、もう一人の登場人物(乙)とを対比しているが、「乙は前にもいった通り天才だちの小供で、不自然な、ひねくれたところがある、甲は心身ともに健全で、二人は性質が全く違ってゐる。(中略) 乙は甲の無意味の言葉を直ぐひがむ、妙にツンとするという風で(後略)」<sup>24)</sup> と、主人公(甲)の性格や行動を、「心身ともに健全」なものとしてみている。二葉亭四迷のこの対比分類は、日本の文化では自然なものであるといえよう。

文章の表面上のことばの意味の裏に隠れた文脈、この論考の場合では教育や青少年の言動に関わる様々な事象の文化的バックグラウンドを、いかに正確に読み取ってゆくかということが、他文化における教育等の社会事象の考察に、このように文学を援用する場合の重要なポイントであるといえよう。

## 註

- 1) 拙稿「フランス語による日本教育情報解題」(『教育交渉史における日本教育観の形成と展開』平成11・12・13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)), 研究成果中間報告書, 2001年3月)。
- 2) 日仏会館所蔵。
- 3) 島崎藤村『春』(『現代文学大系9』島崎藤村集(二), 筑摩書房, 1965年), 97頁。
- 4) 夏目漱石『こゝろ』(『漱石全集』第六巻, 岩波書店, 1966年) 参看。
- 5) 谷崎潤一郎『The Affair of Two Watches』(『現代日本文学全集』第二十四篇, 改造社, 1927年) 257頁。
- 6) 中村星湖『少年行』(『明治大正文学全集』第三十巻, 春陽堂, 1930年), 456頁。
- 7) 二葉亭四迷『平凡』(『二葉亭四迷全集』第四巻, 岩波書店, 1964年), 133-4頁。
- 8) 久米正雄『受験生の手記』(『現代日本文学全集』第三十二篇, 改造社, 1928年) 480頁。
- 9) 前掲書7), 135-6頁。
- 10) 前掲書6), 455頁。
- 11) 同上書, 456頁。
- 12) 同上書, 459頁。
- 13) 坪内雄蔵『当世書生気質』(『現代日本文学全集』第二篇, 改造社, 1929年) 406頁。
- 14) 国木田独歩『運命論者』(『現代日本文学全集』第十五篇, 改造社, 1927年) 88頁。
- 15) 同上。
- 16) 徳富健次郎『思出の記』(『現代日本文学全集』第十二篇, 改造社, 1927年) 105頁。
- 17) 夏目漱石『坊ちゃん』(『漱石全集』第二巻, 岩波書店, 1966年) 241頁。
- 18) 正宗白鳥『何処へ』(『現代日本文学全集』第二十一篇, 改造社, 1929年) 16頁。
- 19) 前掲書6), 458-9頁。
- 20) 前掲書4), 203頁。
- 21) 前掲書18), 16頁。
- 22) 前掲書16), 105頁。
- 23) 同上。
- 24) 二葉亭四迷『『少年行』に就て』(『二葉亭四迷全集』第五巻, 岩波書店, 1938年), 248頁。